

ボラフェスTOKYOへようこそ！

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 実行委員長 枝見 太朗

発信型のボランティアフェスティバル

2011年11月12日、13日、両国国技館と青山学院大学をメイン会場として、第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOを開催します。

日本におけるボランティアの社会的な位置づけの大きな変換点であり、「ボランティア元年」と言われた阪神・淡路大震災から16年が経ちました。その間、ボランティア活動は福祉以外の分野にも大きく広がり、市民活動と呼ばれるようになって、NPO法も成立しました。現在では「新しい公共」が政治の世界でも掲げられるなど、行政と市民、あるいは企業も含めて、協働していくというような社会的状況にあります。

ボラフェスが始まった20年前は、全国のボランティア活動者が一堂に会して一年間の労をねぎらい、明日への希望を見出そうというのが大きなきっかけだったと思います。しかし、さきほどお話ししたように社会環境が変化し社会的な課題が複雑化していくなかで、数年前から社会に対してメッセージを発信していかうという形が変わってきました。東京で活動している私たちにとってもその部分がマッチしていたので、東京で開催することになりました。



「これから」の人も、「これからも」の人も

実行委員会の立ち上げは、昨年5月。当初、新しい公共や協働が進むなかでNPOの自治とは何かとか、あるいは都会でも地方でも孤立が深まっている無縁社会であるとか、若者の居場所であるとか、「つながり」をどうしようかという議論がありました。ところが今年3月に東日本大震災が起きたため、内容を震災にシフトしながら準備を続けてきました。

今回の震災をきっかけに初めてボランティアに触れたという人

がたくさんいます。ただ「被災地に行つて来ました」というのではなく、もう少し掘り下げて、ボランティア活動とは何かとか、自分たちがやったことの価値とか、被災している人たちとの結びつきを議論できるといいですね。

ボラフェスには、これまで地道に活動してきた経験者もたくさん集まります。今回初めてボランティアに触れたという人とも一緒に、あらためてボランティアリズム、ボランティア活動の原点とは何かを考えていきたいと思っています。

テーマに込めた思い

大会テーマは「市民が^{わたしたち}つくる強くしなやかな社会」。強くしなやかな、というのは震災を受けて思い浮かんだキーワードです。実際に被災地に行くと、私たちには想像できないくらいの厳しい環境があります。ですが、みんな、厳しい状況を乗り越えて立ち上がっていかなくてはならない。そういった強さ、お金や数字では換算できない「生きる」という価値は、人と人とのつながりの中でしか培えないものだと思います。人と人との命の営み、きずな、つながりをどのようにつくっていくけば、私たちは強く生きられるのか。それを考え、行動していくことは、まさに、ボランティアや市民活動のミッションです。

経済活動も大切ですが、市民生活の根っこは私たち自身が日々の暮らしのなかで、どう社会と関わり役割を果たすべきかを考えていくことがとても大切だと思うので、それをぜひボラフェスで感じていただきたいと思っています。

特徴ある2つのまちで開催

1日目のメイン会場である両国国技館は墨田区にあります。東

京スカイツリーはまだオープンしていませんが目と鼻の先にありますし、多くの時代小説の舞台となった下町の雰囲気や、相撲のまちの文化にも触れていただけます。

2日目の会場は大都会の渋谷区青山ですが、青山学院大学や国連大学、東京ウイメンズプラザなど、人々が社会と接点をもつための施設がたくさんあります。下町の墨田と洗練された青山、2つのまちを見ていただくことで、そのコントラストを感じる事ができます。

ボラフェスは誰でも気軽に参加できる場

新しいものに触れることはなかなか足が一步前に出ていかないものですが、このボラフェスは、どなたでも気軽に参加できる場です。今まで参加されたことのない人たちには、ぜひたくさん来てほしいと思います。ネットワークの読者のみなさんは、ボランティア・市民活動に参加したことがある人たちですからぜひ参加していただいて、いろいろな出会い、いろいろな学び、あるいはいろいろな感動を得ていただきたいと思いますね。

枝見太郎(えだみ・たろう)

財団法人富士福祉事業団 理事長

1957年東京都新宿区出身。1982年財団法人富士福祉事業団入職、2000年より同理事長。

東京都中長期ビジョン策定諮問会議委員、社団法人東京青年会議所理事長等を歴任。現在は東京ボランティア・市民活動センター運営委員会副委員長、東京都社会福祉協議会理事をはじめとして多数の公益法人、NPO法人などの役員を務める。

1983年インド・ボンベイ(ムンバイ)でマザー・テレサと出会い、亡くなる1997年まで日本におけるスポーツマン、ボランティアコーディネーターの役割を果たした。

取材・構成／中村貴音、吉田真也